松浦宮物語

常磐松文庫所蔵本　二本
黒川文庫所蔵本　三本

持田早百合

本学図書館常磐松文庫に、二本の『松浦宮物語』が収蔵されている。函架番号は共に、「九一三・四Ma八六」で全く同じである。今、これを便宜、A本・B本と分別することにする。

A本は、一冊三巻仕立で、外題も内題もないが、第一巻の扉に相当する丁の中央に「松浦乃宮」とあり、第二・三巻の本文の前の丁前巻の本文の終った後の余白に、それぞれ「松浦宮二」（四一ウ）、「松浦宮三」（九〇ウ）とあって、それらが第二・三巻の表題になっている。第二巻、第三巻の表題は、蜂須賀本にもあるものである。

B本は、表紙題簽に「松浦物語」とあるのみで、第一巻冒頭にも内題等はないし、第一・二巻末尾は、本文が終った後は余白にしてあるだけで、その次の丁の冒頭から次の巻の本文がはじまるが、そこにも内題の類はなく、第二巻・第三巻という表示もない。しかし、この一冊も、本文末の余白のおき方、本文書きはじめの位置からみると、三巻仕立であることは変りはないと見るべきである。

【題号】　この物語は、「松浦宮」「松浦物語」「松浦宮物語」などと、「松浦」にこだわった名でよばれている。それは、この物語の主人公式部少輔兼右少弁中衛少将橘氏忠（うちただ）が、遣唐副使に任ぜられ渡唐することになった時、その母の明日香皇女が松浦（まつら）の山に宮を建てて、そこでわが子の帰国を待とうとする。物語には、

母宮、かぎりあらむ神のちかひにこそはさらめ、この國のさかひをたにいかてかははなれむとのたまひて、こそより松らの山に宮をつくりてかへり給はむまてはそなたの空を見む　（A本一〇オ）

とあり、母宮と大将（氏忠の父）との贈答歌にも、「けふよりや月日のいるをしたふへきまつらの宮にわかこまつとて」（宮）、「もろこしをまつらの山をはるかにてひとりみやこにわれやなかめん」（大将）とある。このことによって「松浦」と称するのであるといわれる。この説に異論を唱えた人もあるが、おおかたの同意はえている。

【跋・奥書】　この物語の諸本は、本文の後に次のような跋・奥書というべきものをもっている。

この物語たかき代の事にて」哥もこと葉もさまことにふるめかしう」見えしを蜀山の道のほとりよりさかし」きいまの世の人のつくりかへたるとて無」けにみくるしきこと」ともみゆめりいつれかまことならむ」もろこしの人のうちぬる」なかといひけんそらことの」なかのそらことをかしう」（一二〇オ）

貞観三年四月十八日

そめ殿の院のにしのたいにて

かきおはりぬ

花非花霧非霧夜半来天

明去来如春夢幾時去似朝

雲無覓處」（一二〇ウ）

これもまことの事也さはかり」傾城のいろにあはしとてあたなる」心なき人はなに事にかゝることは」いひをきたまひけるそと心え」かたく唐にはさる霧のさ」ふらふ」か」（一二一オ）

「花非花……」という詩は、白楽天の「花非花」（『白楽天詩集』巻第十二）と題する詩である。第三句の「幾時」は「幾多時」の誤記とすべきだろう。最後の「これも……」は、伏見院本にはない。後の跋の「傾城のいろにあはし……」も、白楽天「李夫人」（『白楽天詩集』巻第四）の句によるものである。

「貞観三年……」とあるのは、この物語が清和天皇の貞観三年（八六一）の成立又は書写であることを意味するかに思われるが、高田（小山田）與清は、『松浦宮物語考』（文政十二年〈一八二九〉）の中で、この物語中巻に、「かくれみのゝため

しにや……」とあるのは、『かくれみのゝ物語』を引用したもので、「貞観年中の作といへるはいみしきひかこと也」と否認した。これをはじめとして、黒川春村は『古物語類字鈔』で、「文体、詞づかひ」等からみて、「鎌倉のはじめのほど」の作だろうと云った。

その後、藤岡東圃・野村八良・吉沢義則・山岸徳平の諸氏もこれに賛同し、また、桜井秀氏は、風俗史の角度から鎌倉初期・平安末期の成立と考証した。

「貞観三年四月十八日……」とあるのは、この物語が古い時代の作であるかに見せる一つの抜法であると見るべきだろう。前の跋「この物語たかき代の事にて……」も、同じことを狙ったもので、後代の人の証記という形をとっている。後の跋、「これもまことの事也……」も後代の人の批評の形で、「花非花」という詩の心、つまりこの物語の趣を云うものであろう。とすると、これらの跋・奥書の類も、この物語の一部分とみなすべきもので、普通の跋文・奥書のように、その著作の成立や書写の経緯をのべるものではない。これらの跋・奥書は蜂須賀本以下の諸伝本にはあるのが普通だが、この「これもまことの事也……」という跋が、伏見院本にないことは前述した。

【作者・成立年代】「貞観三年四月十八日……」と奥書にあるが、この物語の本文の中に、平安末期、鎌倉初期を意味する徴証と思われるものがあるので、この年号を成立年と考えることはできないとされたが、それ以上のことは知りえなかった。ところが、鎌倉初期の文芸評論として知られる『無名草子』（一二〇〇年頃）の「この頃出で来るもの」の条に、

又定家少将のつくりたるとてあまたはんべるめるは、ましてたゞけしきばかりにて、むげにまことなきものに侍るなるべし、まつらの宮とかやこそ、ひとへに萬葉集のふぜいにて、うつほなとみるこゝちして、おろかなる心もおよばぬさまに侍るめれ

と、藤原定家を作者に擬する説があることは知られていたが、「貞観三年……」とあまりに距りがあること、従ってこの定家作とは改作についての記事かとも考えられたらしく、特に検討されたこともなかった。志田義秀氏が、「軍記物語と擬古物語」（「国語と国文学」大正14年10月）の中で、「或は根據のある所伝ではあるまいかと思はれる……」と論じたのが最も早い時期のものである。その後、小木喬・手崎政男・石田貞吉・水野治久・荻谷朴・吉田幸一[註]その他の諸氏の調査・研究によって、定家を作者とみることはできる、しかも、その定家の若いころの作という点ではほぼ一致したようであり、吉田幸一氏

は文治五年（一一八九）定家二十八歳のころかと推測している。しかし、諸氏の努力にも関らず、断定することはむずかしいといわれている。

註　小木喬「松浦宮物密につきての考察」（「国資と国文学」昭和10年11月）
手崎政男「定家の物昨創作―有心体究明の一準備―」（「国語と国文学」昭和15年6月）
石田吉貞「松浦宮物語の作者は藤原定家か」（「国語と国文学」昭和15年6月）
水野治久「松浦宮物語の成立年代と作者について」（「国語と国文学」昭和15年6月）
荻谷　村「松浦宮物語作者とその漢学的素養」上・下（「国語と国文学」昭和16年8月・9月）
吉田幸一「松浦宮の成立年時と作者についての考説」（「平安文学研究」昭和34年7月）

【諸本】　この物語の諸本に関しては、蜂須賀笛子氏によって、蜂須賀本（蜂須賀侯爵家旧蔵、文化庁現蔵、南北朝時代書写）その他が紹介され、また翻刻・刊行された（岩波文庫・昭和10年1月）。その後、小木喬氏その他の調査・報告があり、それらをうけて坂本まさる氏が、吉田幸一氏所蔵の伝伏見院宸翰本（武田儀一氏旧蔵、鎌倉末期書写）の紹介を主とした「松浦宮物語新考」（『古物語論考』㈠昭和30年）、「松浦宮物語随考」（「鶴見女子短大紀要」昭和30年11月）の中で、約二〇本の伝本を列挙している。『松浦宮物語』の現存諸本のほぼ全体にわたっていることになるだろう。今日もこれに追加しうるものは少ない。

これら諸伝本中の最も書写年代の古いものが、この吉田幸一氏所蔵の伝伏見院宸翰本であるが、まだ、その本文・体裁の全容が公開されてはいないので、不明な点が多い。今、坂本まさる氏の前記報告によると、およそ次のような伝本であるらしい。

伏見院本は、筆蹟・料紙・体裁等の特徴を綜合して考えると、書写年代は鎌倉末期とみるべきで、現存諸伝本中最古の書写本で、後述するこの物語の成立年代とも近接する時期の書写本として注目すべきものである。

これに次ぐ伝本は、蜂須賀家旧蔵の伝後光厳院宸筆本（現在は文化庁所蔵）で、南北朝時代の書写とされる。これは、昭和十年、岩波文庫の一冊として翻刻刊行され、附録として小山田與清の「松浦宮物語考」があり、また、蜂須賀笛子氏の詳細な解説がある。この解説は、その後部分的修正を必要とするところも生じたが、基本的な事実はこれによって明かになり、この物語の研究の進展に寄興したものである。当時、翻刻は、この外には続群書類従本があるだけであったので、この文庫本がいわば流布本的存在と見られていたが、これも今日では入手しがたくなっている。しかし、この本は、「原装影印古典

籍覆製叢刊」の中で複製本として刊行されているのを利用することができる。

右二本の外、宮内庁書陵部（「桂宮本叢書」第十六巻に翻刻　昭和34年3月）、内閣文庫・京都大学文学部・東北大学・尊経閣文庫・静嘉堂文庫・無窮会神習文庫その他に所蔵されていることが知られている。活字本としては、既述のものの外に角川文庫に入っているものがある。

概略右のような状況であるから、注目すべきは、吉田氏所蔵の伝伏見院宸筆本と蜂須賀家旧蔵の伝後光厳院宸翰本であるが、この二本の間には、次のような出入があるといわれる。

(1)　伏見院本には、蜂須賀本その他の諸本にはない次のような和歌一首と地の文とがある。

「よしこゝに我たまのをはつきなゝん月のゆくへをはなれさるへくみこいとあはれにて」という歌と地の文とが、華陽公主の歌、「てなれぬるたまのをことの契ゆへあはれとおもひかなしともみる」（蜂須賀本二七オ）の前に入っている。（従って、「みこいとあはれにて」の「みこ」は華陽公主である）。この物語の中で、華陽公主が一人だけで歌を詠んだ例は他にはないと坂本まさる氏はいう。

(2)　伏見院本には約四丁分の欠脱がある。

この四丁分は、蜂須賀本の五五ウから五八ウであると坂本氏の報告にある。この欠脱に伴って、伏見院本は、蜂須賀本の五六ウから五七オの間にある五首の歌（「はてもなく」「あまつ空」「みることに」「おもふとも」「われなから」）をもっていないことになる。この(1)と(2)とをまとめると、蜂須賀本等は七〇首の歌をもっているが、現在の伏見院本は六六首の歌をもっているにすぎないが、本来は七一首の歌をもっていたことになるのであろう。

(3)　蜂須賀本その他の諸本には、第三巻の本文の後の跋・奥書めいたものの後に、「これもまことの事也……かたく唐に

はさる霧のさ」ふらふか」

という跋があるが、伏見院本はこれを欠いている。

他の跋・奥書めいたものと同様に、この物語を古い時代のものにみせようとするものの一つであるらしく、必ずなければならぬものではないが、これが欠落していることは、伏見院本と蜂須賀本とは系統を異にする伝本であることを意味するのかもしれない。

(4) 蜂須賀本に「河北二十二郡」（六七ウ）とある前後十六字分が、伏見院本にはない。しかも、文章としてのつながりには不都合はないと坂本氏はいう。

「伏見本にない事は後人の加筆も考慮しなければならないと思ふ」とも坂本氏はいう。その当否はともかくとして、伏見院本のこの欠落が、単なる誤写ではないとするならば、伏見院本と蜂須賀本とは、別系統の伝本であることを認めねばなるまい。

(5) 伏見院本と蜂須賀本との本文を比校してみると、次のような違いがあるといわれている。例示した本行は蜂須賀本である、行間の校異は伏見院本である。

(イ) さいふ(宰相(伏))もわかきめこをとゝめてひとりいてたれは、（一三ウ）

(ロ) くものほかとをつさかひのくに(くもゐと(伏))人もまたかはかりのわかれやはせし(墻(伏))（二四ウ）

(ハ) 憲徳をつかはしてその身三人の子をいけなからとらへて金増城(きんぞうせい)と云所に閉てさけをのませてころしつ（四八ウ～四九オ）

(ニ) あさゆふたちなるゝ人〳〵きゝおとろきつゝきとふらふもおとなしのたきたつねぬ(さと(伏))心地のみして……（七七ウ）

右の中の(イ)の「さいふ」は、蜂須賀本独自の誤写らしい。諸本には「宰相」とある。

伏見院本には、蜂須賀本（伝後光厳宸翰本）や後花園院宸翰幕本等にあるような書入れや削除の跡もなく、他の諸本にある文章・文字の誤りも少く、概しては整った本文をもっているといわれるが、本文全体が公開されていないので、積極的に利用できないのが残念である。以上の比較からみても、「伝後光厳院宸翰本（注蜂須賀本）と対立する唯一の別本と見なされる伝伏見院宸翰本」（角川文庫『松浦宮物語』凡例）という荻谷朴氏の発言は肯定してよかろうと思う。この伏見院本・蜂須賀本二系統をたてておいて、この常磐松文庫の二本の位置を考えてみることになるのであろう。

常磐松文庫本　A本　「松浦乃宮」

【形態】縦二三糎、横一七・二糎。粘葉装。表紙は鳥子紙、紺地に金泥で草花を描いてある。裏表紙も同じく紺地で、金

泥で水辺の草花を描いてある。表紙は秋、裏表紙は夏であろうか。表紙には、題簽・外題の類は何もない。わずかに、扉に相当する白紙の中央に「松浦乃宮」とあるのがこの物語の表題のようだが、実はこれが第一巻の冒頭でもある。次丁からの本文のはじまるところには、内題もない。料紙は楮紙であろう。

三巻仕立であることは既に云ったが、墨付は扉の「松浦乃宮」とある一丁を加えて総数一二二丁である。本文は、第一巻四〇丁（二オ～四一ウ）、第二巻四九丁（四二オ～九〇オ）、第三巻三〇丁（九一オ～一二〇ウ）で、その後に奥書・跋二丁（一二一オ～一二二オ）がある。第一～三巻を、上・中・下三巻と称する人もある。

【本文】　本文は、「松浦乃宮」とある丁の次の丁（二オ）の冒頭からはじまる。一面九行、一行の字詰は一七から二三～四字ほどである。和歌は、改行して、行頭から一～二字下げて上の句を書き、多くは上の句だけでその一行を終り、下の句は次行の行頭から欠字なしで記す。その後に余裕があれば、歌につづけて地の文を書きはじめる。

この本文に、

書き入れ　四〇例（15・12・33）

見せ消ち　九例（3・3・3）

がある（括弧内の数字は、第一・二・三巻の数量）。例えば次のようである。

わかき。世（うちに）つきたる（三ウ⑥）

雲（の）もほかにして（一一ウ①）

蜂須賀本	常磐松文庫本A本
燕王（ニヤム）（33ウ⑧）	燕王（38オ①）
文武（フ）（35オ④）	文武（39ウ⑤）
蜀山（ショク）（37ウ②）	蜀山（41ウ⑦）
六軍（リクグム）（67ウ⑥）	六軍（83ウ⑨）

本文中の固有名詞・官職・難読語には、平仮名で訓み仮名がつけてある。その総数は一五一箇所である。その中の三八箇所には蜂須賀本も片仮名で訓みをつけてあるが、残る一一三箇所に蜂須賀本は訓み仮名をつけない。また、蜂須賀本に仮名がつけてあって、常磐松文庫本にはつけてないものが四箇所ある。前記の通りである。

常磐松文庫本の本文と蜂須賀本の本文とを比較してみると、殆ど異同はない。訓み下した時、両者の本文が同じになるということだけではなく、漢字と仮名の宛て方も殆ど一致する。ただし変体仮名の字体には異なるものが使われることも多い。物語冒頭の辺を例示してみると次のようである。例示する本行は蜂須賀本である。行間に示した校異は常磐松文庫本の本文で、漢字・仮名の宛て方の違いや、仮名づかいの違いも掲出する。

むかし藤原のみやの御時、正三位大納言にて中衛大將かけたまへる、橘冬明ときこゆる、あすかのみこの御はらに、たゝひとりもたまへるおとこ君、かたち人にすくれ心たましゐ世にたくひなく、おひいてたまふを、ちゝ君はさらにもきこえず、時の人いみしき世の光とめてたてまつる、七さいにてふみつくり、さま〳〵の道にくらきことなし、御門きこしめして、これたゝ物にはあらざるへし、とけうせさせたまふ、御前にめして心みの題を給に、たとるところなくめてたきふみをつくり、すへておひいつ」るまゝに管絃をならひても、師にはさしすゝみふかきてともをひけば、はて〳〵は人にもとはす、おほくは心もてなむさとりける。十二さいにて、御まへにてかうふりせさせて、うとねりになさせたまふ。あけくれこの人をもてあそはせたまふに、いたらぬ事なくかしこけれは、つかさかうふりもほとなくたまはりて、十六といふとし式部少輔右少辨中衛少將をかけて、從上の五位になりぬ、ちゝ君、身にあまる官爵をみたまふにつけても、ひとつ子にしあれは、ゆゝしうのみ」おほさる、さしいてたまふたひに、この子ゆへにのみめむほくをほとこし給へは、ましてなのめにおほされむやは、かたち身のさえ、たらへることこそあらめ、世のつねのわかき人のこと、色めきあたなることもなし、たゝみやつかへをつとめ、かくもんをしてあかしくらせは、御門をはしめたてまつりて、まめにおとな〳〵しきものとおほしたるに、わかき心のうちひとつなむ、ひとやりならすくるしかりける、かんなひのみことときこえて、きさきはらにて、かたちのかきりなくきよらに」ものしたまふをなむいはけなくよりいかてと思こゝろふかゝりける、いつれもいとわかきうちに世つきたる心もなけれは、はるけやるかたなくてすきつるを、九月菊のえんはてゝ夕に人ゝまかてちるに、なをさりぬへきひまもやと、宮にまいりてけしきをとるに、宮も御まへのかれ野御

らんすとて、はしちかうおはします程なりけり、むつましくまいりなれたまふ君なれは、ふともいりたまはす、御ひはをわさとならすかきならしつゝおはします」けはひしるきに、（おはしますけはひしるきおはしますけはひしるきに）

冒頭二丁分ほどにすぎないが、殆ど異同はない。わずかにあるのは、

(1) 蜂須賀本の誤説の訂正に従ったもの

(2) 書写者の機械的な誤脱と思われるもの

だけで、全体としては、蜂須賀本の用字までを踏襲した忠実な書写で、書写者の意図的な改訂や、他系統伝本による書写とおぼしきものは見当らない。結局、(2)のような不用意によるのであろうが、機械的誤写である。例えば次のようなものである。

	蜂須賀本	常磐松文庫本A本
1	わかき‖心（四オ⑧）	わか心（三ウ①）
2	ものしたまふをなむ‖（四ウ⑪）	ものしたまふをなん‖（三ウ④）
3	おはしますけはひしるきに（四ウ⑪）	おはしますけはひしるきおはしますけはひしるきに（四オ⑤）
4	さえをこゝろみ（一〇オ①）	ざえをこゝろ見（一〇オ④）
5	この人おしふる程に‖（一〇オ⑤）	この人おしふる程（一二オ⑦）
6	いまさらにおもかけそへるは（一二五オ⑨）	いまさらおもかけそへるは（一一八ウ③）
7	としわかくさえおろかなるたひ人（四九オ⑩）	わかくさえおろかなるたひ人（五九オ⑥）
8	のたまはする御気しき‖（七四ウ④）	のたはする御気色‖（九三オ①）
9	うちまもらるゝにつけて（八二ウ⑤）	うちまもらるゝにつけても‖（一〇三オ⑤）

これらは、機械的な誤写、不注意による脱字・衍字の類で、意図的な誤脱とは思われない。他の誤脱もほぼこの種のものである。蜂須賀本を直接の書本とした伝写本ときめるわけにはゆかないが、書写者は、蜂須賀本乃至はその系統の本を忠実に筆写することを期していたのであろう。とすると、書写者が意識的に蜂須賀本と違うことをしているのは、字詰・行数等

の違いの外には、前述したように、固有名詞や官職名その他の難読語に訓み仮名をつけたことだけではなかろうか。

常磐松文庫本　B本「松浦物語」

【形態】縦二六・五糎、横二〇・八糎。袋綴、大和綴。紙表紙は、空色地に草花の唐草模様、裏表紙も同じである。表紙の左上に題簽（縦一八糎、横三・七糎）があり、これに「松浦物語」とある。これ以外に、この物語の題号を示すものはない。扉に相当する部分は白紙で、前遊紙になる。本文は次の丁の冒頭からはじまるが、そこにも内題等はない。

扉・内題・巻数等は全く見当らないが、第一巻と第二巻、第二巻と第三巻との間には余白をおき、第二巻・第三巻をそれぞれ次丁の冒頭から書き始めているので、三巻仕立とみるべきであることは前述したが、その墨付総数は九六丁で、その内本文は、第一巻三一丁（一オ～三一ウ）、第二巻四〇丁（三二オ～七一ウ）、第三巻二五丁（七二オ～九六オ）、この第三巻最後の丁は二行だけで、次行からこの丁の裏へかけて跋（このものがたり……）、奥書（貞観三年……）、詩（花非花……）、跋（これもまこと也……）がある。従って総丁数はこの九六丁で終る。その後遊紙一丁をおいて裏表紙となる。

【本文】本文は、前遊紙の次の丁（一オ）の冒頭からはじまる。一面九行、一行は一九字～二六字詰ほどである。

和歌は、改行して行頭から二字ほど下げて書き出し、下の句もつづけて書き、次の行にわたる時は、行頭から書く。歌が行の途中で終る時は、次の地の文をその下につづけて書くのが普通であるが、その型を崩しているところが一箇所ある。

それは、この物語の最初の歌、弁少将の「おほみやの庭の白菊……」と詠みかけた歌に対する神奈備皇女の返しの歌、「秋をへてうつろひぬともあた人の袖かけめやもみやの白菊」という一首で、地の文が「かんなひのみこ」と終った後に、行をかえずに、一字分ほど空白をおいただけでこの歌を書いている。これは、書写者の失錯であろうと思う。

和歌は、この誤記したものをも含めて六九首である。蜂須賀本は七〇首あるが、このB本には、八オの三行目に、約一丁分（蜂須賀本一〇オ①～11オ⑪）の脱落があり、従って、この部分にある「いきのをに君か心したくひなはちへの浪わけ身をもなくかに」という一首が脱落しているので、六九首となる。

このB本の本文と蜂須賀本の本文とを比較してみると、本文としては蜂須賀本系統のもののようであるが、A本のよう

に、漢字・仮名の宛て方（用字法）までを踏襲しようとする忠実な書写本ではない。本文の異同の数も非常に多い。しかも、不用意・不馴れによる誤写が多いが、不注意も度がすぎているところがある。一行分ほどの脱落もいくつかあり、時には一丁分ほどの脱文もある。まず、冒頭から四丁ほどの間の異同を例示してみると、

	蜂須賀本	常磐松文庫本B本
1	身のさえたらへること（四オ③）	身のさえたしなへる支（二オ③）
2	え心つよかるましうそあるや（五ウ③）	心つよかるる歟ましうそあるにや（三ウ①）
3	えかはかりならすやとそ（五ウ⑥）	えかはりならすやとそ（三ウ④）
4	人の御心もえんなり（五ウ⑩）	人の御もえん也（三ウ⑥）
5	ほのかにの給かはすに（六オ③）	ほのかにのたまはすに（四オ①）
6	いかにものおもふわか身とかしる（六オ⑨）	いかに物思我とかはしる（四オ⑥）
7	つとゝらへたれは（六ウ11）	へととらへたれは（四オ⑦）

のようになり、不用意・無意識というよりは、文章の意味を理解していない人が、字面だけを見て書写しているのではないかと思われるほどに乱暴な書写態度である。ただし、B本の書写者のこの書写態度も傍若無人だが、それはこのB本の書本に既にあったものを踏襲しているだけなのかもしれない。B本と蜂須賀本との本文を比べると、B本には脱文が九箇所ほどあるが、その脱文の箇所には、例えば次のようなものがある。

(1) いまはとまいりたまひし後ひとこと葉の情もなかりつるを心うしと思ふに(イ)將さへそひおはすれは師の宰相いみしくけ(ロ)いしてあそひ文つくる（B本　八オ③）

傍線(ロ)の「けいして」も理解しにくいところで、蜂須賀本では「けいめいして」（経営して）とあるのに拠るべきだろう。これも文章を読んでいるとは考えられらい誤写であろう。もっと甚だしいのは、傍線(イ)の部分で、文章として意味のつづかないことはいうまでもないが、実は、B本を読んで来ると、「心うしと思ふに」というところまでは、遣唐副使に選ばれた弁少将の都を出発する前の話である。ところが「帥の宰相」とは大宰帥の宰相で、これは九州大宰府での話である。この奇

妙な文脈が出て来るのは、蜂須賀本と比較してみると、大きな脱文があることに由来する。つまり、「思ふに」（蜂須賀本一〇ウ①）と「將」（蜂須賀本一一オ⑩）との間に、和歌一首を含む約一丁分の脱文がある。そこには、弁少将の母宮明日香皇女が、九州松浦の山に宮を造り、そこでわが子の帰りを待とうというので、皇女の夫（弁少将の父）の中衛大将も同行して、親子三人が大宰府に到着したという、「松浦宮物語」という題号の由来となる話が語られている。その一丁分を脱落させたのは、「心うしと思ふに」で丁の表（奇数頁）が終り、「なをおりすぐさず」から、「大宰府につき給ぬ、大」までが、丁の裏と次丁の表、つまり見開き二頁（一丁分）に書かれていたところを、二枚いっしょにめくって、そのまま機械的に書写したものではなかろうかと思われる。

紙二枚を誤っていっしょにめくってしまうことは往々にしてあることである。しかし、ここのように、全く文脈がつながらぬところを見逃して書写するのは、不注意もいささか度がすぎているかと思う。B本の書写本の見落しなのか、B本の書本に既にあった脱落なのかは断定すべくもないが、この誤写がB本八オの三行目にあることから考えると、B本が蜂須賀本からの直接の書写本でないことだけはほぼ確実である。これがB本の本文の大きな脱傷であることは否むべくもない。

もう一例、次のようなものがある。

(2) 燕王もちゐる所は、金をあませるあき人、さけの有にふける弟（本ノマヽ）なり、さらにあとををひてなましゐに母后てうにのそむ名をぬすまんとす（B本四一オ⑦）

「さけの有」は、蜂須賀本によれば「酒の色」である。「弟」（本ノマヽ）は、字体のみならず意味も理解しかねたので「本ノマヽ」としてあるのだろうが、蜂須賀本ははっきり「小羊」とする。A本も同じである。活字翻刻では、岩波文庫本・角川文庫本共に続群書類従本を参考にしたのか「小年」「少年」とするが、桂宮本叢書は「小羊」である。明白な典據は見つかっていないといわれているが、「少年」の方が穏当であるかにも思われるが、蜂須賀本は明白に「小羊」である。

さて、傍線を附した「あとををひて」は「後を追ひて」の意であろうから、それに「さらに」とかかることはありうるが、何を意味するのか解釈しがたい。これも、「さらに」（蜂須賀本四四ウ⑨）と「あとををひて」（蜂須賀本四五ウ③）との間に、約一丁分の脱文がある部分である。そこには、幼帝の母后が、牝鶏が朝することをすまいと心がけて来たが、幼帝を輔け摂政すべき人がみな逆臣に弑せられていなくなったので、国を乱した先例があることは承知だが、母后が朝に臨んで政をとろう

と思うということが語られている。母后のこの決意が語られていないと、その後の話の展開の必然性が薄れてしまう。とすると、この脱文も、文脈に無関心な書写態度を物語っているものになるであろう。この大きな脱文のあることが、このB本の価値を損うことはやむをえない。

この外に、一行分ほどの脱文が七箇所ある。例を示しておく。例示本行は蜂須賀本で、その傍線部分がB本の脱文である。

(3) そのねをつたへてのちに」わか國にてそのこゑをたて給ことなかれと返〳〵契てあけゆく程にあかれぬれハすゝろにものかなしくてかへる道すからなかめをのみそする（蜂須賀本二二ウ①　B本一八ウ④）

(4) 御門母后ひとつ御こしにのり給てにはかに未央宮をいて給ぬさすかに文武のつかさをしたかへて……（蜂須賀本三五オ③〜⑤　B本三〇ウ⑥）

(5) はるかなるしも屋にかしらしろき女のひとり侍つるにこゝはいかなる人かよひたまふとゝひ侍つれとこゝは人のすみ給所にもあらす……（蜂須賀本六〇オ⑨〜⑫　B本五八ウ③）

(6) まとろますねぬ夜にゆめのみえしよりいとゝおもひのさむるまそなき雨ふりくらしていとくらき夜の空をなをあけなからなかめいてたれとうれへやるかたなきに……（蜂須賀本六九オ⑫〜ウ①　B本六九オ③）

(7) …けさしもあさまつりことといとゝうハしまりてたひ〳〵めさるれはいそきまいるれいのことゝもはてぬれハ御門御もの かたりなといとなつかしうかたらはせたまひつゝ日もくれぬ（蜂須賀本七九ウ④〜⑥　B本七八ウ⑨）

(8) あつさ所せきころまつりことハてぬるにことにうとき人もさふらハす御門后すこしうちやすませたまふとて水にのそみたる廊のかせすゝしきかたにおはしますにめしあれはまいりてつちひさしのいしのうへにさふらふ（蜂須賀本八一ウ③〜⑥　B本八〇ウ⑨）

(9) ……けちかき御けはひにハましてなにのことはりもおほえ」すたゝいま一たひのゆめのたゝちをのみおもひいらるれと……（蜂須賀本八六ウ⑪〜八七オ①　B本八五ウ⑧）

以上の脱文を見ると、(5)は、「はるかなる」と「いかなる」とが隣同志の行に並んでいるための目移りから、一行分の脱

文を生じたのかと想われるが、その他は、そのような理由も見当らない。文章としての意味を考えずに書写しているとしか見えない。脱落した分量の大小に関らず、本文を理解している人の書写とは思われない。

B本の本文は、このような異文・脱文があるにも関らず、系統としては、蜂須賀本の系統と見なすべきであろう。蜂須賀本と伏見院本との少数の異同例によっても、蜂須賀本系の特徴をもっている。伏見院本系統と認めるべき徴証は見当らない。しかし、良好な本文とは云いがたいもののようである。

本学図書館黒川文庫にも、「松浦宮物語」の伝本が三本収蔵されている。表紙にそれぞれ「本居大平本」「月屋升芳本」「春村校本」とある。この三本をこの順にA本・B本・C本として、その概要を紹介しておこうと思う。

黒川文庫本A本　本居大平本「松浦宮物語」　七五五〇八～一〇

【形態】上、中、下三巻仕立。各冊約縦二六糎、横約一九・二糎。袋綴。表紙は紙表紙。薄茶地の紙に代赭色の不揃いの模様が入っている。裏表紙も同じである。

表紙左上部に題簽（白紙）縦一八・一糎、横三・七糎、上冊には、これに「松浦宮物語　一名正三位上」、中冊には「万津良乃宮物語　中」、下冊には「奈浦宮母のかさ　下」とある。中、下冊の題簽の文字は行書で同筆だが、上冊だけは楷書に近く、異筆ではないようだが、中・下とは時を異にする筆かとも思う。「一名正三位」とあることも上冊だけのことである。上・中・下の表紙裏（見返し）の右端上部に、「松浦宮物語上（中・下）」とあり、上冊では、その下に、「或云正三位物語」という小書がある。これらの筆は、上・中・下同筆で、かつ上冊題簽の字と同筆である。

上・中・下の表紙右端、綴糸わきには、円の中に「物語」とある朱印と、その下に「本居大平本」とある。また、各冊表紙裏（見返し）左下には、「藤垣内印」と四字を二行に並べた四角の黒印がある。本居大平の所蔵印である。また各冊とも、この印の右に「黒川眞道藏書」という長方形朱印がある。

遊紙（扉）はなく、表紙の次の第一丁オから本文がはじまる。その丁の右下部に、上から、「黒川眞頼藏書」という長方

形朱印、「黒川眞頼」を二字宛二行にして円の中に収めた朱印、最下部に、「本居蔵書」と縦書きした朱印がある。

墨付は、上冊三六丁、中冊四六丁、下冊本文二九丁、奥書等二丁、合計一一三丁である。

【書写年代】 こまかには分らないが、「藤垣内印」「本居蔵書」という蔵書印があるから、藤垣内翁（本居大平）の所蔵本であったことは確かである。大平は、宝暦六年（一七五六）に生まれ、天保四年（一八三三）九月十一日、七十八歳で歿しているから、天保四年以前のものであることはわかる。また、大平が、「藤垣内（フジノカキツ）」と称するのは、寛政十年（一七九八）四十三歳の八月だといわれている。『藤垣内翁略年譜』（『国学者伝記集成』第二巻、九七三頁）の寛政十年の項に、「八月、新座町といふに、歌のまどゐの新室をまうけて、やがて藤垣内と名づけ給ふ」とある。大平が宣長の猶子となったのは、この翌年のことである。とすると、「藤垣内」という蔵書印があるのは、この本が寛政十年以後大平の手もとにあったもので、後年黒川真頼の所蔵本となったものと思われる。

【本文】 前述のように、各冊とも、表紙の次の丁表（遊紙なし）から本文がはじまる、一面十行である。蜂須賀本とは、判の大きさも違うし、一面の行数も違うので、一面に書かれる分量も違うことになるのは当然だが、この大平本と蜂須賀本とを比べてみると、字体は違うが、漢字と仮名との宛て方は非常によく似ている。従って本文も、殆ど同じである。ただし、書写者の力量は古典を十分に読みこなしているとは考えがたい程度のもので、誤写とまでは云いがたいが、漢字にも仮名にも字画のあいまいな文字がかなり多い。そのため、朱筆で、本行の句読を切り、濁点を加えると共に、そのあいまいな字画の字をわきに書き直してあるものの数がかなり多い。中には、墨書の本行の文字（漢字も仮名も）の上に朱筆で点や画を補ってあるものも往々にしてある。一見して他本の本文と比校したかに思われるが、見直してゆくと、これはいささか力量不足の書写者の書写した本を、力量のある人が書本と比校して朱筆で改訂したものであろうかなどと推測しうるものである。多くは、あいまいな字体を朱で書き直したものである。たとえば、「丶てろえ」（八オ⑨）と訓める本行を朱で見せ消ちにして、右行間に、「こゝろミ」と朱で訂正してあるようなのは、他本の本文と校合したかに見えるが、再度見直すと、この本行は「こゝろミ」のあいまいな字画が、たまたま「丶てろえ」と見えるにすぎず、これなどが最も複雑な一例である。だから、この写本の朱筆は校合の跡というよりは、字画の訂正というべきなのかと思う。他の本文との間の辞句の異同による校異・改訂とみうるものが見当らないことも、校合の跡ではないことを意味しているのであろうと思われる。今、黒川文

庫本A・B・Cの異同のいくつかを例示しておく。

黒川文庫諸本対照表

	蜂須賀本	大平本（A本）	月屋本（B本）	春村校本（C本）
①	身のさえたらへる（二オ—③）	身のさへたらへる（二オ—⑤）	身のさえたらひたる（二オ—⑥）	身のさえたらへる（たらひたる古（朱））（二オ—②）
②	おほしたるに（二オ—⑦）	おほしたるに（二オ—⑨）	おほしたてるに（二オ—⑩）	おほしたるに（たてる古（朱））（二オ—⑥）
③	心さはきして（三オ—①）	心さハきして（三オ—③）	心さはきして（三オ—⑤）	心もわき〳〵して（さわ古（朱）、古无（朱））（二ウ—⑨）
④	あたれるまのすのしたに（三オ—⑦）	あたれるまのすのしたに（三オ—⑨）	あたれるすのしたに（三ウ—②）	あたれるまのすのしたに（古无（朱））（三オ—④）
⑤	かつ〳〵（七ウ—⑪）	かつ〳〵（八オ—⑧）	かつ〳〵（八ウ—④）	かれ〳〵（ゝつ古（朱））（七ウ—⑥）
⑥	道〳〵の人（八オ—①）	道〳〵の人（八オ—⑧）	ミち〳〵の人（八ウ—⑤）	ミお〳〵乃事人（ミち〳〵の人古（朱））（七ウ—⑥）
⑦	こゝろ見（八オ—①）	こゝろミ（こゝろミ（朱））、、、（八オ—⑨）	心ミ（七ウ—⑦）	こゝろミ（風葉集（朱））（七ウ—⑦）
⑧	弁少将うちたゝ（九ウ—⑪）	弁少将うちたゝ（一〇ウ—②）	弁少将うちいてゝ（一〇ウ—⑦）	弁少将うちたゝ（氏忠いてゝた（朱））（九ウ—⑤）
⑨	ひんなくも（一〇ウ—⑩）	ひんなくも（一一オ—②）	みな〳〵も（一一オ—⑦）	ひんなく（みな〳〵ノ（朱））（一〇オ—④）

註一　春村本、および大平本⑦の左右行間の文字は朱筆である。
註二　春村本⑨の「ひんなく」は「も」を写し落したものらしい。

上巻のはじめ一〇ページほどの本文の異同の目につくものを拾ったものである。大平本は蜂須賀本とほぼ同じであること、⑦も異文ではない。春村本の朱筆改訂に用いた「古本」とは月屋本であることなどを見てとることができる。

黒川文庫本B本　月屋升芳本「松浦乃宮」　七五五〇二～四

【形態】　上、中、下三巻仕立。各冊縦約二四糎、横一八糎。白茶紙表紙。裏表紙も同じ。本来は綴葉装であったものらしいが、現在は、右端から〇・七糎ほどの所二箇所を紙紐で綴じてある。

表紙中央上部に題簽（朱色地に金泥模様、縦一五・三糎、横三糎）があり、それに「松浦乃宮上（中・下）」とあり、右綴糸近くに円に「物語」とある朱印、その右に「月屋升芳本」、右端下部には「共三冊」とある。前遊紙一丁、その右下部に、「黒川眞頼蔵書」「黒川眞道蔵書」「黒川眞前蔵書」とある。三つの長方形朱印と、円の中に「黒川眞頼」とある円形朱印とが捺してある。また、右端の上部綴近くに「松浦宮上」（中巻の「松浦宮中」は表紙裏紙の糊がきかなくなってはがれた紙の内側の綴糸近くにある）

中巻の前遊紙に眞頼・眞道・眞前の蔵書印が捺されていることは上巻と同じである（下巻にもある）。その外、この頁の付箋に朱筆で次のようにある。

拾遺恋一しのふれといろに出にけり」わか恋ハものやおもふと人のとふまて」といふ哥を本哥としてかけるところ」ありこの哥ハ平兼盛の歌也兼盛」ハ天暦の御時の人なり困ておもふに」このものかたりハ天暦より後の作なること」いちしるし

とある。

下巻の前遊紙にも同じく蔵書印がある。下巻末の奥書等の次の丁に、これも朱筆で、

天保八年丁酉季冬一読畢

月ゟ屋主人升芳（花押）

とある。「一読畢」という時が天保八年（一八三七）であるから、この本の書写年代はこれより溯ることはいうまでもない。

しかし、その筆蹟から見て江戸時代の筆とすべきではなかろうか。

次に紹介するC本（春村校本）が、校合に用いている「古」と称する本文、奥書に、春村が「以古写本令一校了」と記している古写本とは、前掲の「諸本対照表」で見ると明らかなように、このB本（月屋本）である。慶応二年（一八六六）六十八歳で歿した黒川春村から見れば古写本であったが、非常に古い写本ではないように思う。

紙数は、本文は上巻三六丁、中巻四六丁、下巻二七丁、遊紙は各巻の本文の前後に各一丁あり、合計一一五丁、その中墨付は、本文の合計一〇九丁と「天保八年……」という朱筆奥書のある下巻の後遊紙一丁とで、合計一一〇丁、遊紙のままのものは五丁となる。

【本文】この本文は、蜂須賀本系統といいうるものであるが、須須賀本を祖本とする伝写本とはいいがたい異同があることは、前掲の対照表の①②④⑧⑨等にも見えている。字形の類似からの誤写かと思われるものもないではないが、蜂須賀本の本文とは別系統の本文かと思われるものが多い。「中衛大将」「中衛少将」の「中衛」を「なかゑ」と訓み、「橘冬明」の「橘」を「たちはの」と訓んでいて、また蜂須賀本の「はて〳〵ハ」（二ウ②）を「いて〳〵は」（一ウ④）と表記するようなのは、書写者の古典読解の力量不足に由来する誤脱とみるべきなのであろう。それらのような異文のあることを別にすれば、この本文は、概しては蜂須賀本に近い形の本文である。たとえば、A本・C本の本行の本文よりは、蜂須賀本の形を残しているといいうる。

この本の本文に加えた朱の波線や、上欄の「世の光」「従上の五位」等の用語の見出しは、筆癖等からみると、巻末の月屋升芳の奥書と同筆であるから、升芳が一読する際に加えたものと思われる。

黒川文庫本　C本　春村校本「松浦之宮」　七五五〇五～七

【形態】上、中、下三冊仕立。各冊縦約二七・三糎、横約一九糎、袋綴。青色の紙表紙。裏表紙も同じである。表紙中央上部に墨流し模様のある題簽がある。縦一九糎、横四糎。この題簽に、上巻では「松浦之宮　上」、中巻では「まつらのみや　中」、下巻では「松浦乃宮　下」とある。

各巻共に、表紙右端上部の綴糸近くに、円に「物語」とある朱印がある。上巻のこの朱印の下部に朱筆で、「春村校本」とある。下巻の最終丁、跋の後に、

天保十三年正月以古写本令一校了　　黒川春村

とある。春村は、寛政十一年（一七九九）六月九日生まれ、慶応二年（一八六六）十二月二十六日歿したのだから、天保十三年（一八四二）は春村四十四歳の年である。

上巻表紙見返しの貼紙には、「篳篥」「壎囊抄」のことを朱筆で書いて墨線をひいて抹消し、次行に、これも朱筆で「風葉所載歌十八首」と記してある。貼紙のその左の余白に、墨筆で、「まつらの山に宮をつくりて……」と『松浦宮物語』の「松浦宮」の由来を語る文を引用してある。

次の上巻の前遊紙オには、『正徹物語』下を引用し、この引用のための余白附箋には、『塵袋』巻七の『松浦宮物語』に関する記事を引用してある。また、この遊紙の右下の部分には、「黒川眞頼蔵書」（長方形）、「黒川眞頼」（円形）という蔵書印がある。遊紙の次の丁の表から本文が始まるが、この面の右下綴糸近くに、「黒川真道蔵書」（長方形）という蔵書印がある。中巻では、前遊紙の表左端に「松浦宮中」とある。真道の蔵書印（長方形）が前遊紙表と最終丁裏とにあり、真頼の蔵書印（長方形と円形）が本文第一丁右下の部分に捺されている。

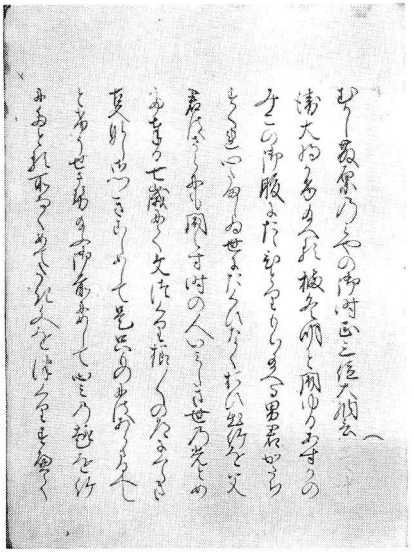
紙数は、本文が、上巻三二丁、中巻四二丁、下巻二八丁、この外各巻に前遊紙各一丁、従って、墨付は、本文合計一〇〇丁に、上・中巻の前遊紙にそれぞれ墨書きがあるので、これを加えると墨付は一〇二丁である。下巻の表表紙の裏紙（見返し）の白紙の糊づけがはがれた内側の左端に「松浦宮下」とあるが、本来の紙数には数えないものなので除いてある。

【本文】　前掲の黒川本諸本対照表にもあるように、この本行の本文も蜂須賀本系統のものではあるが、誤写や脱文もあって、必ずしも良好な書写とは言いがたい。春村は、この本文に、朱筆で句読を切り、かつ「古写本」（B本）との校合をしてその異同を行間に記し、「古」と註記した。前述したようにB本（月屋本）は、誤脱・異同もあるが、概しては蜂須賀本系統なので、この校合によって本行の誤脱や字画のあいまいなものを訂すこともできたが、朱墨で、C本とB本とを並記した形になったところが多く、本行の辞句を見せ消ち等で廃棄してB本をとったというところは少ない。春村の労作ではあるが、善本を見ることができなかったことは、春村の努力の効果を著しく減殺するものであったのだと思われる。

以上、常磐松文庫本二本、黒川文庫本三本を紹介したが、いずれも蜂須賀本系統の伝本であるが、その中では常磐松文庫A本が、書写年代も古く、最も忠実に蜂須賀本を書写したものと云いうるだろう。書写年代でいえば、黒川文庫B本がその次かと思うが、このB本をはじめとして常磐松文庫B本、黒川文庫のA本、C本の四本は、蜂須賀本の中の異本かもしれない。いずれの伝本も、目につくほどの特徴を持っているとは云いがたいものである。

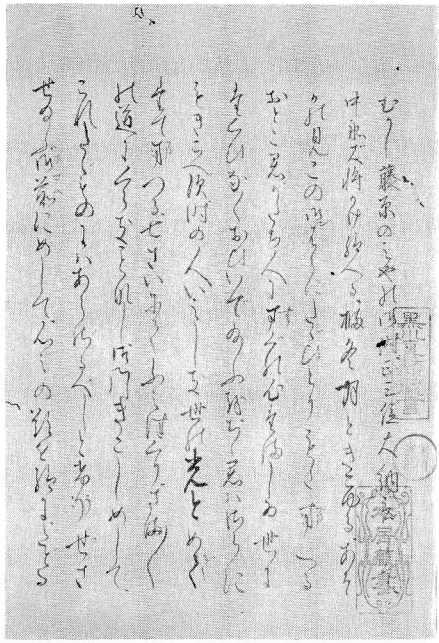
口絵３　常磐松文庫Ａ本「松浦乃宮」本文冒頭

口絵２　常磐松文庫Ａ本「松浦乃宮」表紙

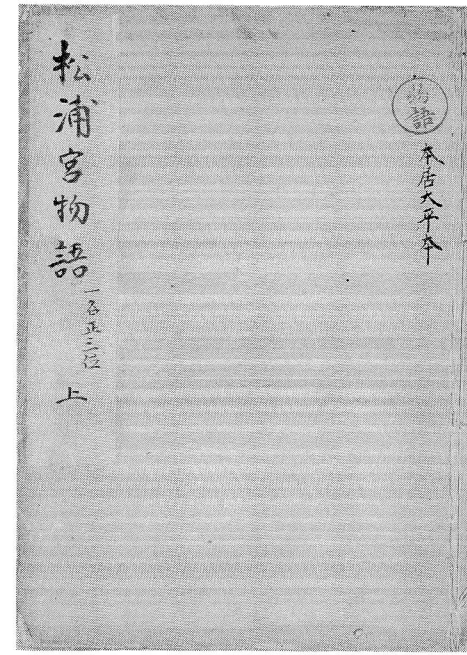


口絵５　常磐松文庫Ｂ本「松浦物語」本文冒頭

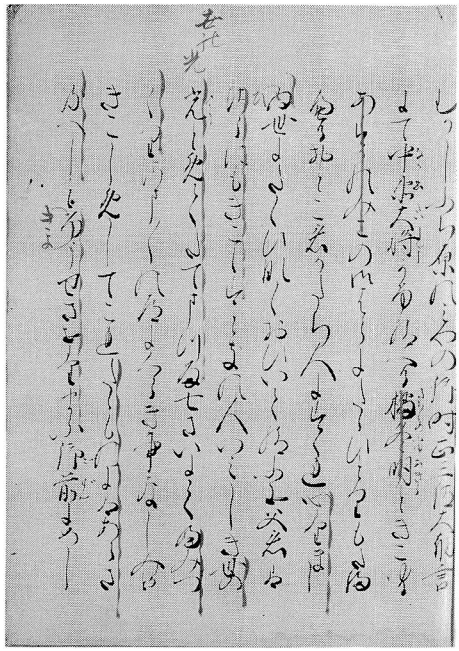
口絵４　常磐松文庫Ｂ本「松浦物語」表紙



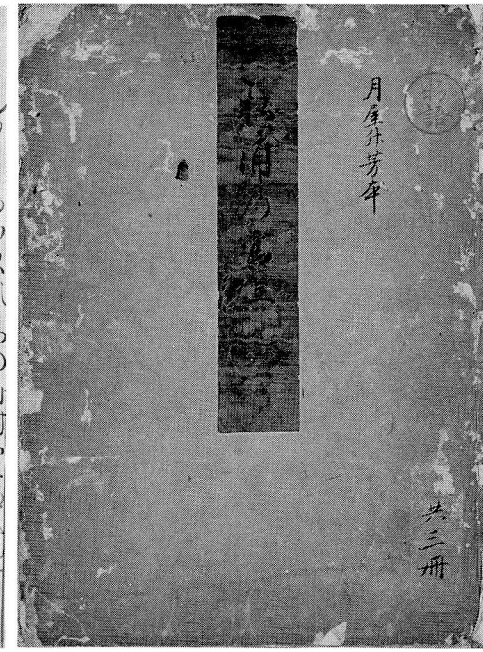
口絵7　黒川文庫A本「松浦宮物語」本文冒頭



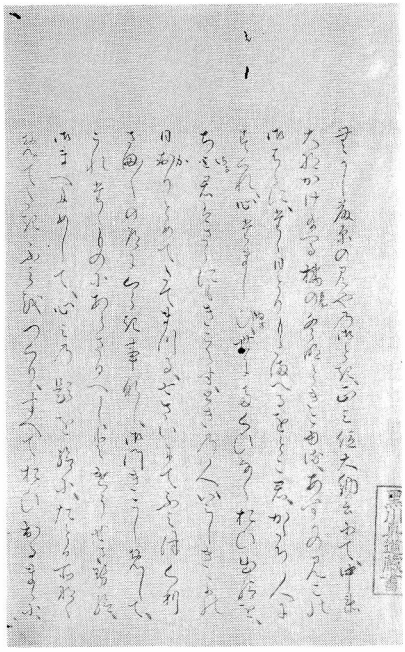
口絵6　黒川文庫A本「松浦宮物語」表紙



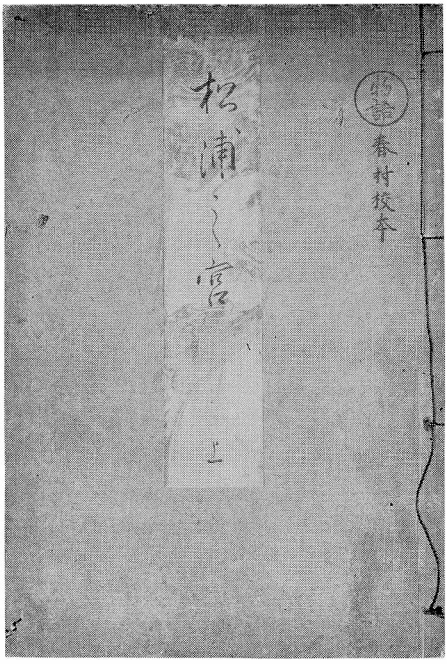
口絵9　黒川文庫B本「松浦乃宮」本文冒頭



口絵8　黒川文庫B本「松浦乃宮」表紙



口絵11　黒川文庫Ｃ本「松浦之宮」本文冒頭



口絵10　黒川文庫Ｃ本「松浦之宮」表紙

[redacted]